平成六年十月一日発行（毎月一日一回発行）

經濟論叢

第154巻　第4号

アメリカにおける概念フレームワークの
現状と会計規則の動向……藤　井　秀　樹　1

「経営者資本主義」のゲーム理論的基礎……石　黒　真　吾　13

マルクスの「社会」概念と独占資本主義の
理論……石　川　康　宏　26

正常価格体系と稼働率……平　野　嘉　孝　42

平成6年10月

京都大學經濟學會

経済論叢（京都大学）第154巻第4号，1994年10月

マルクスの「社会」概念と独占資本主義の理論

石　川　康　宏

I　森岡孝二氏の2つの問題提起

ソ連・東欧諸国の崩壊をきっかけに，「死滅しつつある資本主義」という帝国主義の歴史的地位にたいする規定を否定する議論が目につくようになってきた[1]。レーニンはこの規定を「帝国主義の経済的本質」である独占資本主義の把握によって導いたのであり，そうであれば「死滅」規定の当否をめぐる議論の核心はレーニン独占資本主義論をめぐる議論にこそあるはずなのだが，まだその肝心の議論は充分に行われていないようである。

資本主義の「基本的特質」を，自らの「直接の対立物」である独占へと転化させることなしに，資本主義は剰余価値生産を追求することができなくなった。そこにこそレーニンが帝国主義をより高度な社会への過渡ととらえる根拠があったのだから，資本主義にとって外的な存在であったソ連・東欧諸国の消長によってではなく，資本主義経済自身の内的な関係――特にその発展段階――の分析に基づいてこそ，この規定の当否は論じられねばならない。

さて，この10年ほどのあいだにも，レーニン独占資本主義論をめぐってはいくつかの注目すべき研究成果があった。いわゆる「資本主義の全般的危機」論

1)　たとえば，ロバート・アルブリトン「帝国主義段階は資本主義の最高段階か」『経済論集』（北海学園大学）第39巻第1号（1991年9月），75－89ページ。後藤道夫「現代の社会変動をひきおこすもの――『資本主義の最高段階』（？）としての大衆社会的資本主義」唯物論研究協会（編）『社会主義を哲学する――崩壊から見えてきたもの』大月書店，1992年，18－52ページ。市原健志「いわゆる『資本主義の最高の発展段階』規定について――『超帝国主義論』の現代的有効性」中央大学社会科学研究所（編）『現代国家の理論と現実』中央大学出版部，1993年，273－305ページ。

をめぐる議論の中では，レーニンが大局的な時代認識としての「死滅」規定と，具体的な状況認識としての「革命的危機」規定とを区別しており，レーニンに「資本主義の全般的危機」論の源流を見ることは誤りであることが明らかにされた。また「帝国主義の段階のなかに，特別の『解体の時期』を設定しようとする『全般的危機』論者」にたいして，レーニンの見地が「"急速な発展こそが崩壊を準備する"というこの歴史の弁証法」を主張するものであったこともあらためて確認されている[2]。

だが，もう1つ，私が最近の独占資本主義研究において大いに注目し，本稿でもとりあげたいと考えているのは，森岡孝二氏がマルクス主義経済学の発展をめざす立場から行った，現代資本主義論の理論構成にかんする問題提起である。有井行夫氏からの批判をきっかけとした森岡氏による現代資本主義論の再検討は，まだその姿を充分にあらわしているとはいえないが，少なくとも，(1)労働過程研究なき経済学への批判，(2)『資本論』の有効性を産業資本主義段階に閉じ込めるという意味での段階論への批判，という大きな2つの方向は明らかにされている[3][4]。労働過程研究の重視という点は，有井氏による批判以前からの氏の問題意識の一層の展開といえるのだろうが，いずれにせよこれらはマルクス主義経済学のさらなる発展に向けて，明らかに積極的な意味をもつ問題提起である。

氏のこうした問題提起が，あまり大きな反響をよぶこともなく現在にいたっ

2) 不破哲三『「資本主義の全般的危機」論の系譜と決算』新日本出版，1988年。

3) 森岡孝二「構造転換分析と経済理論」基礎経済科学研究所（編）『〔講座〕構造転換・経済学の新展開』青木書店，1987年，13－40ページ。同「現代資本主義分析の諸前提」『経済』（新日本出版）第285号（1988年1月），208－223ページ。同「いまなぜ労働過程研究か」『経済科学通信』（基礎経済科学研究所）第56号（1988年6月），12－15ページ。同「現代資本主義論の反省課題」『経済科学通信』第58号（1988年12月），14－20ページ。

4) 森岡氏の理論展開に大きな影響を与えた有井行夫氏の研究については次のものを参照のこと。有井行夫「独占資本主義論における『構造』と『歴史』――森岡孝二著『現代資本主義分析と独占理論』」『経済論集』（関西大学）第33巻第2号，1983年7月，19－68ページ。同「独占資本主義論における『構造』と『歴史』・付論」『経済学論集』（駒沢大学）第18巻第4号，1987年3月，195－218ページ。同『マルクスの社会システム理論』有斐閣，1987年。同「現代経済学の方法」『経済』第288号（1988年4月），108－117ページ。

ているのはいささか不思議な気がするのだが，私はすでに進められつつある氏らの労働過程研究の成果に大いに期待している。だが同時に，こうした労働過程研究の成果を含み，また先に述べた意味での「段階論的理解にまつわる固定観念を一掃して，一般理論としての『資本論』の名誉回復をはかる」ような経済学体系の具体的なあり方という点では[5]，いくつかの疑問もないではない。そこで，本稿では，上のような問題意識の正しい解明がマルクス主義経済学の発展にとって不可欠であるとの見解を森岡氏と共有し，その問題提起が実りある成果につながることを切望するという立場から，問題解決の方向について私の意見を少し述べてみることにしたい。

II 「土台」は「生産諸関係の総体」

先ず，現代資本主義論固有の問題に入る前に，そもそもマルクス主義経済学の研究対象とは何かという問題について考えておく。森岡氏の労働過程研究の強調が，この論点と深くかかわっているからである。

森岡氏は「わが国のマルクス経済学で今日までまかり通ってきたのは，社会の経済的構造をもっぱら生産諸関係の総体とみて，社会の経済的構造ないし上台から生産諸力を排除し，生産諸力の運動を経済学の研究課題から除外するような見解であった」と述べ，「しかし，生産諸関係の内容をなす生産諸力を社会の経済的構造から排除しては社会のしくみや運動はとらえようがない」とこれらの見解を批判する。そして生産力と生産関係とを「内容」と「発現形式」との関係にあるものとした上で，経済学の研究対象を「土台＝生産関係」ではなく「土台＝生産様式」であると主張される[6]。

私は，「経済学の研究課題」から生産力を排除することに対する森岡氏の批判には強い共鳴を覚えている。資本主義的生産関係の変化・発展を把握するには，資本主義の枠内で新たな生産関係を次々に展開する原動力となる生産力の

5) 前掲・森岡「現代資本主義論の反省課題」19ページ。
6) 前掲・森岡「構造展開分析と経済理論」14－19ページ。

発展をとらえることが前提とならざるをえないし，また資本主義が自らの限界そのものをこえて前進するための物質的条件の成熟は何よりもその生産力の発展にあるのだから，資本主義を歴史的な存在として把握するマルクス主義経済学が，生産力を「研究課題」の外において良いはずがない。

「私がこの著作で研究しなければならないのは，資本主義的生産様式と，これに照応する生産諸関係および交易諸関係である」と『資本論』初版への序言で述べたマルクスが，『資本論』の本文冒頭を同じく「資本主義的生産様式が支配している諸社会の富は」と書き始めていることに，マルクス主義経済学本来の研究対象が生産力をその内に含んだ「生産様式」に他ならぬことが端的に示されている[7]。

だが，それにもかかわらず，私は「土台＝生産様式」説ではなく「土台＝生産関係」説を支持する。文献解釈の詳細に立ち入る余裕はないが，私はマルクスが『賃労働と資本』において述べた「生産諸関係は，総体として，社会的な諸関係，つまり社会とよばれるものを，しかも一定の，歴史的な発展段階における社会，他と区別される独特の性格をもった社会を，かたちづくる」という場合の「社会」概念が，後の経済的社会構成体概念に発展していくとする見解に賛同し[8][9]，また，『経済学批判』の序言におけるいわゆる定式の「実在的土台」については，これを「生産諸関係の総体」と読む見解に同意する[10]。

先に引いた『賃労働と資本』の一節の直前で，マルクスは「生産において人

7)　カール・マルクス『資本論』社会科学研究所監修/資本論翻訳委員会訳，新日本出版，第1分冊，9ページおよび59ページ。

8)　カール・マルクス「賃労働と資本」服部文男訳，『賃労働と資本/賃金，価格および利潤』新日本文庫，10－89ページ。引用は53ページ。

9)　マルクスの経済的社会構成体概念の形成過程と，マルクスやレーニンによるその概念の理解については，不破哲三「社会構成体論争と史的唯物論」『科学的社会主義研究』新日本出版，1976年，211－249ページを参照のこと。

10)　森岡氏に先立って中村静治氏が「土台＝生産様式」説を力説され，森岡氏も中村氏の文献を肯定的に引いておられる。「定式」の読み方の検討を含む中村氏の「土台＝生産様式」説に対する批判的研究として，牧野広義「史的唯物論の基礎カテゴリーについて」『唯物論と現代』（関西唯物論研究会）第7号，1991年4月がある。中村静治『生産様式の理論』青木書店，1985年，同『唯物史観と経済学』大月書店，1988年とあわせて参照されたい。

びとは，たんに自然に働きかけるだけではない，またたがいにもはたらきかけあう」と述べ，かれらがそこで「たがいに一定の関連と関係」に入り込むその「社会的関連と関係」のことを，「生産者たちがたがいにはいりこむこれらの社会的諸関係」あるいは「社会的な生産諸関係」と言い換えている[11]。ここから，先にみたマルクスの「社会」概念が，人々の「自然に働きかける」側面の捨象の上に成り立つことは明らかであり，その「社会」概念の延長線上に位置する経済的社会構成体概念が，人々の「自然に働きかける」側面の捨象の上に成り立つことも明らかである。そこで，私は，この概念に人々の「自然に働きかける」側面をも同時に読み込もうとすることは，先ずマルクスの読み方の問題として誤りであると考える。

加えて，土台に生産力を含ませようとする考え方は，人間の生産活動の全体から「社会的関連と関係」の側面だけを抽象的に分離し，先ずはその内容を分析的に確定しようとする認識上の作業そのものの意義を見失わせることにもつながる。史的唯物論は，人々の多様で複雑に絡み合う「社会的な諸関係」全体の内部構造——もっとも基本的には土台と上部構造との相互関係——を分析し，その成果を基礎に，人類社会がつねに特定の歴史的発展段階にある社会であること，また人類社会の歴史がそれら「人類史上の特別の発展段階」にある社会の交代の歴史としてあることを主張する。そして，この意味での「一定の歴史的な発展段階にある社会」を表現する概念こそが経済的社会構成体であった。マルクスは人間の生産活動全体から「社会的な諸関係」を抽象的に分離し，先ずはその分析をつうじて，「あらゆる社会関係のなかから生産関係を，それ以外のすべての関係を規定する基本的な，本源的なものとして」取り出し[12]，社会（「社会的な諸関係」の全体）が様々な関係の混沌ではなく，歴史的な特定の生産関係に基礎づけられた有機的な統一体であることを明らかにし，それら

11) 前掲・マルクス『賃労働と資本』52－53ページ。
12) ヴェ・イ・レーニン「『人民の友』とはなにか，そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか？」『レーニン全集』，大月書店，第1巻，123－349ページ。引用は130ページ。

「生産関係」の歴史的性格の相違にしたがって，人類の歴史を「人類史上の特別の発展段階」の交代の歴史としてとらえることを可能にした。

「土台＝生産様式」論では，「生産様式」を土台として含む経済的社会構成体もまた，「社会的な諸関係」と「自然に働きかける」側面との統一としてあることになる。この立論を前提しながら，上のように「社会的な諸関係」全体から「生産関係」を「本源的なものとして」取り出すことの重要な意義を認めようとすれば，「土台＝生産様式」論は経済的社会構成体概念の内部に，あらためて「社会的な諸関係」を表現する概念と「自然に働きかける」側面を表現する概念とを分離して示すことが求められ，しかも，そうして得られた「社会的な諸関係」全体についての認識成果は「経済的社会構成体」とは別の新概念によって把握せずにおれなくなる。だが，そのような具体的提案はまだなされていないようである。

III　「経済学の研究課題」は土台に限定されない

ところで，Ⅰで述べた「経済学の研究課題」から生産力を除外してはならないとする見解と，Ⅱで述べた土台は生産力を含まぬ「生産諸関係の総体」であるという見解はどのようにして整合性をもちうるか。それは，経済学が土台のみを研究する科学であるという「暗黙の了解」を否定することによってである。確かに「市民社会の解剖学は経済学のうちに求められねばならない」。そしてここにいう「市民社会」とは「生産諸関係の総体」たる「社会の経済的構造」に他ならない。だが，このことは経済学が「市民社会」をしか「解剖」しない科学だということを結論させるものではない。逆に経済学は「市民社会の解剖学」としての威力を発揮するためにこそ「物質的な生産手段，生産諸力の変化および発展」をも「解剖」せずにおれない科学なのである。

経済的社会構成体が人々の「社会的な諸関係」を把握した概念だということは，裏をかえせば，それはそこで捨象された「自然に働きかける」側面についての研究成果によって補完されることをあらかじめ予定した概念だということ

でもある。

マルクスは人類史を「大づかみにいって，アジア的，古代的，封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる」と述べているが，この「生産様式」という概念は個々の「経済的社会構成」の基本的性格を決定する土台というような意味で用いられているのではない。「一つの社会構成は，それが生産諸力にとって十分の余地をもち，この生産諸力がすべて発展しきるまでは，けっして没落するものではなく」とあるように，「経済的基礎」と「巨大な上部構造全体」という「社会的な諸関係」の変革を内容とする「社会変革」は，「社会の物質的生産諸力」と「既存の生産諸関係」との「矛盾」によって引き起こされる。だが，マルクスによれば，その「矛盾」の一方の極をなす「生産諸力」は「社会構成」の外部にあるのだから，そこには当然，「生産諸力」と「生産諸関係」との両者を内に含むより包括的な概念が必要とされる。そうして登場するのが「生産様式」概念である。つまり，上の文章は人々の「自然に働きかける」側面としての「社会的生産諸力」と，人々の「社会的な諸関係」としての「生産諸関係」とを統一する「生産様式」全体の歴史的変化にしたがって，その一面として，社会関係としての「経済的社会構成のあいつぐ諸時期」があるということを述べたものなのである[13]。

私は経済的社会構成体と生産様式との関係をこのように考えることによって，森岡氏のすすめる労働過程研究を，マルクス主義経済学における生産力概念を豊かにするとともに，それと生産関係との相互関係を問題とする生産様式概念の内容を豊かにし，さらに経済的社会構成体概念と生産様式概念との関係を内容豊かに展開していく素材を提供するものと受け止めている[14]。

13) 以上「定式」からの引用については，カール・マルクス「『経済学批判』への序言」『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店，第13巻，5－9ページ。引用は6－7ページ。

14) 向井俊彦氏も，森岡氏や中村氏の問題提起に関連して，むしろ「社会構成体と生産様式のダイナミックな関係ということをセットで議論すべきである」との見解を示している。向井俊彦「現代資本主義分析と史的唯物論の基礎カテゴリー」『唯物論と現代』第6号，1990年11月，68－77ページ。同「今，唯物史観の課題を考える」『唯物論と現代』第11号，1993年4月，51－60ページ。

自由競争段階から独占段階への資本主義的生産関係の変化とそれを基礎づけた生産力変化との相互関係の考察や，独占段階内部における生産関係の変化と生産力の変化との相互関係の考察が[15]，独占資本主義論には当然含まれねばならないし，独占資本主義論はなによりも資本主義の独占段階における生産様式分析としてあらねばならない。だが，それは「土台＝生産関係」説の立場を基礎にして行われるべきだというのが，私の考え方である。

IV 「資本主義一般の基本的特質」と「独占的諸形態」

ところで，いま私は「独占段階」という言葉を用い，「独占資本主義」という言葉を用いた。だが，森岡氏はこうした用語法自体が「資本主義の段階論的理解の一面性」の反映だと考えておられるようである。次に，この「資本主義の段階論的理解」という問題について考えてみたい。

森岡氏が批判する段階論の「原点」とは，「マルクスの『資本論』を資本主義の一般理論をあたえたものであると同時に産業資本主義段階に独自な理論，その意味での段階論をあたえたもの」とする考え方である。こうした「理解にあっては，先行の理論はそのままにしておいて，その上に新しい特徴づけを付け加えていくという」方法がとられ，「理論は，産業資本主義論＞独占資本主義論＞国家独占資本主義論＞現代資本主義論と，先に行くほど細っていく，あるいは一般性を失っていく」ことになる[16]。

私も，こうした意味での「段階論」には反対である。「資本主義体制の経済的編成を全体的に写しだし，現実の資本主義体制の発展からたえず新たな理論素材をうけとって，みずからの現実性を確証していく理論のみが資本主義的生産様式の一般理論としての資格を有」する[17]。私もそのとおりだと思う。

15) ここで生産力と生産関係との「相互関係」という言葉を用いるのは，両者の関係には「生産力が第一義的には生産関係を規定する」という側面だけではなく，「新しく成立した生産関係は『生産力の発展形態』として，すなわち生産力を逆に規定して（エンゲルスの言葉では『反作用』して）生産力を発展させる」という側面が含まれるからである。前掲・牧野「史的唯物論の基礎カテゴリーについて」12ページを参照のこと。

16) 前掲・森岡「現代資本主義論の反省課題」15ページ。

では，上のような「段階論的理解」にとってかわる「経済理論の現代化の試み」はどのような内容となるか。森岡氏は「資本主義の発展構造をその死滅の諸契機をもふくめて全体的に理論のうえに映し出すには『資本論』の方法以外の方法はありえない」とする[18]。そして資本主義の現代的発展を「独占的諸形態の発展」と，それとは「性質を異にする資本主義の発展的諸形態，現代的諸現象」とに区別し，両者いずれをも「マルクスが『資本論』であたえた資本の一般概念にそくして」展開しながら，特に前者については資本の「自己否定形態として」展開せねばならないと述べ[19]，さらに，『帝国主義論』の「分析対象」が「資本主義の独占的諸形態に絞られて」いるにもかかわらず，その「方法を絶対化」する誤った傾向のために，「現代の社会的生産の編成原理である資本・賃労働関係を生産と労働の基礎過程において考察する点で決定的な不十分さ」が残されたと，既存の独占資本主義論を批判されている[20]。

論ずべきいくつかの点から，ここでは最も肝心と思われる，氏の『帝国主義論』の方法にたいする評価の問題を考えてみたい。結論から言えば，私はレーニン独占資本主義論の分析対象は，氏のいう「資本主義の独占的諸形態」のみに限定されてはおらず，「独占的諸形態」と，氏のいう「現代的諸現象」との「混合」の具体的なあり方にこそあったと考えている。そして，「現代的諸現象」の研究を含んだレーニン経済学の方法を，後の研究者が十分正確に継承していないところにこそ，労働過程研究の希薄化を招いた方法論上の弱点があったのではないかと考えている。

『帝国主義論』は，「帝国主義の経済的本質」である独占資本主義の歴史的発生を，一方では「資本主義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続」として，「資本主義のもっとも特徴的な特質の一つ」である「生産の集積」「集

17) 前掲・森岡「現代資本主義分析の諸前提」220ページ。
18) 前掲・森岡「現代資本主義論の反省課題」19ページ。
19) 前掲・森岡「現代資本主義分析の諸前提」219－221ページ。
20) 前掲・森岡「現代資本主義分析の諸前提」210, 221ページ。前掲・森岡「現代資本主義論の反省課題」16－17ページ。

中」から説明し，他方では「だが，資本主義が資本主義的帝国主義になったのは」「資本主義のいくつかの基本的特質がその対立物に転化しはじめたとき」だと説明している[21]。つまり，帝国主義は資本主義の「基本的特質の発展およびその直接の継続」の結果として，その特質の一部が自らの「対立物に転化しはじめた」段階の資本主義としてとらえられる。この帝国主義成立の「過程で経済的に基本的」なのは，「資本主義と商品生産一般との基本的特質」である「自由競争」に，その「直接の対立物」である「独占」が「とってかわったこと」である[22]。

だが，「基本的特質」の「いくつか」が「転化しはじめた」ということは，そうした「転化」をとげぬ「基本的特質」がまた残るということでもある。すべてが「その対立物に転化」するのであれば，資本主義はすでに資本主義とは異なる他の何物かに「転化」していることになる。だが，現実はそうではない。そこで，帝国主義には，森岡氏のいう「基本的特質」の「現代的諸現象」と，「基本的特質」の「直接の対立物」とが並存することになり，「帝国主義の経済的本質」の分析を主要目的とした『帝国主義論』は[24]，当然その両者を分析の視野に含めずにおれない。

確かに，レーニンの研究の具体的な成果には「基本的特質の分析でみるべきものがほとんどなかった」と言うことが可能かも知れない[25]。だが，例えば，「コンビネーション」を「最高の発展段階に達した資本主義のきわめて重要な特質」として述べている点は[26]，独占の形成を基礎づける生産力の具体的な歴史的形態を論ずるという視点が『帝国主義論』に存在したことを示している。また，独占が「不可避的に停滞と腐朽との傾向を生み出す」にもかかわらず，

21)　レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」『レーニン全集』大月書店，第22巻，213－352ページ。引用は225－227ページおよび306ページ。
22)　前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」307ページ。
23)　前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」307ページ。
24)　前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」216ページ。
25)　前掲・森岡「現代資本主義論の反省課題」16ページ。
26)　前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」227ページ。

全体としての「資本主義は，以前とは比較にならないほど急速に発展する」という事実を，独占が競争を「完全にまた長期にわたって排除できるものではない」ことに求める論理は[27]，『帝国主義論』の中心課題が自由競争と独占との相互関係の分析にあることを典型的に示すものとなっている。この自由競争と独占との相互関係の分析が，資本主義の「基本的特質」とその「直接の対立物」との相互関係全体の分析の中で，最も「基本的」な地位を占めるものと位置づけられている事実は，忘れられてはならない。

したがって，レーニンの独占資本主義論は「資本主義一般の基本的特質」の「現代的諸現象」を分析する視角を方法的に欠いていたわけではない。自由競争を「資本主義一般の基本的特質」として，また独占をその「直接の対立物」としてとらえ，さらにその両者の「混合」を独占資本主義の本質ととらえる。このレーニンの方法を正確にとらえ，両者それぞれの内容分析の上に立って，その「混合」の具体的な分析をすすめるという方向をはっきりと自覚すること。これこそが，独占資本主義論の現代的発展にとって必要な課題なのである。

V 「基本的特質の分析」と「帝国主義の分析」

森岡氏の「経済理論の現代化の試み」をめぐりもう一つ論じたい点は，「独占的形態」であれ「現代的諸現象」であれ，「資本主義的生産様式の一般理論」は現実の発展が提起する新しい「理論素材」をどのように含みこんで発展するのかという問題である。氏は「独占資本主義論の通説」では「独占資本主義の理論は資本主義的生産様式の一般理論とは切断された地平に構成されることになる」と述べ，その批判を意図した氏自身の過去の見解にも現代の一般理論を「資本主義一般の理論と独占資本主義の理論との二大部篇からなる重層システムとして展開されるべき」とする「弱点」があったと反省される。そして，これにとってかわる体系を「資本主義的生産様式の一般理論の個々の部篇にそれらの理論的諸規定を取り入れて，一般理論に現代性を付与する」ものと論じら

27) 前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」319, 347ページ。

れている[28]。氏の新しい提起が直ちに『資本論』の「個々の部篇」に新しい「理論素材」を直接「取り入れる」という方法を意味するか否かは明らかでないが，しかし，いずれにせよ，私はこの問題についてもレーニンの帝国主義認識の方法に学ぶべき点が多いと思う。

レーニンは「資本主義という基礎をもたない純粋の帝国主義など」存在しないとして，帝国主義を「古い資本主義のうえに立つ上部構造である」と位置づけ，そうした現にある帝国主義の全体構造ゆえに，「資本主義一般の基本的特質の分析に帝国主義の分析をつけくわえるのを，私は『機械的』だとみとめることはできない」と述べ，さらに「交換，商品生産，恐慌等々の一般的分析はそのままのこしておいて，成長しつつある独占の特徴づけをくわえる綱領のほうが，ずっと正しいだろうし，はるかに正確に現実を再現する」[29]と述べている。

「現実」が「古い資本主義」を排除しない以上，「現実を再現」する理論は「古い資本主義」の解明である「資本主義一般の基本的特質の分析」を排除するわけにはいかない。同時に，帝国主義は「資本主義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続」として生じているのだから，「帝国主義の分析」は抽象から具体への論理の発展において「資本主義一般の基本的特質の分析」を，より抽象的なものとして前提せざるをえない。つまり，「現実」における土台と上部構造という関係は，同時に「抽象的なものから具体的なものへと一貫して上昇する」論理上の関係でもある[30]。こうして独占資本主義の理論は，実は『資本論』に代表される「資本主義一般の基本的特質の分析」と『帝国主義論』に代表される「帝国主義の分析」との総体としてあり，この意味で「独占資本主義の理論はそれ自体としては一つのシステムをなしえない。資本主義の理論

28)　以上，前掲・森岡「現代資本主義分析の諸前提」221－222ページ。
29)　レーニン「ロシア共産党（ボ）第８回大会」『レーニン全集』大月書店，第29巻，127－217ページ。引用は156ページ。前掲・レーニン「党綱領改正資料」，492－493ページ。
30)　見田石介「『資本論』・『帝国主義論』・国際経済論」『見田石介著作集』大月書店，第５巻，187－201ページ。引用は199ページ。

を一つの体系として構成しうるのは，現実の資本主義が一つの体制として実在するから」とする森岡氏の見解に合致する[31]。レーニンは自立した二つの理論体系の積み重ねによって「現実を再現」しようとはせず，一つの理論体系の内的要素としての二つの部篇の関係を問題にした。

「基本的特質の分析」を前提とする『帝国主義論』は，「交換，商品生産，恐慌等々の一般的分析」という意味での「資本主義一般の基本的特質の分析」を行ってはいない。だが，例えば「カルテルによる恐慌の排除」を「ブルジョア経済学者たちのおとぎ話し」と一蹴しながら，「独占は，総体としての全資本主義的生産に固有の混沌状態をつよめ激化させている」と述べているように[32]，『帝国主義論』は「基本的特質」が帝国主義段階において被る歴史的形態規定についてはこれを実際に分析してもいる。

この点は「資本主義一般の基本的特質の分析に帝国主義の分析をつけくわえる」という先の見地とどういう関係にあるか。それは「古い資本主義」が実は帝国主義の「萌芽」であり，帝国主義を潜在的に内包する資本主義であって，他方，上部構造としての帝国主義が「古い資本主義」を完全に排除することのできない，「古い資本主義」を内包した帝国主義だという事実によって説明される。「自由競争の支配する古い資本主義にかわって独占の支配する新しい資本主義が現れた」と[33]，その歴史的段階における「支配」的な要素の交代によって資本主義の段階区分をする場合に示されるように，レーニンは厳密には「古い資本主義」と「新しい資本主義」との双方を自由競争と独占との統一としてとらえており，そして，例えば「帝国主義とは資本主義の独占的段階である」と簡潔に述べる場合には[34]，独占が自由競争を支配するという関係をその支配的要素である独占によって代表させている。

したがって，レーニンのより厳密な用語法にしたがえば，土台における「基

31) 前掲・森岡「現代資本主義分析の諸前提」220ページ。
32) 前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」239ページ。
33) 前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」250, 277ページ等。
34) 前掲・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」307ページ。

本的特質の分析」とは自由競争が支配的な段階の資本主義の分析を，上部構造の「帝国主義の分析」とは独占が支配的な段階の資本主義の分析をそれぞれ意味することになり，上部構造を分析する『帝国主義論』に独占が支配的な段階における「基本的特質」の分析が含まれることは，レーニン自身の帝国主義認識の方法のむしろ一貫性を示している。独占が自由競争を支配する段階では，「資本主義一般の基本的特質」は独占という「支配的な原理」によって「規制」「着色」され，「従属」させられ，「具体化され，変容され」る[35]。例えば『帝国主義論』が述べていない平均利潤法則の失効という問題も，資本家間での剰余価値の再分配という「資本の一般法則」が，独占段階において新たに被る形態規定の分析という意味で，また同じことだが，それ以前の段階における「一般法則」の新たな「具体化」「変容」の分析という意味で，「帝国主義の分析」に含まれるべきものといえる[36]。

資本の本性を「発展諸段階の根底に共通の実体として静かに横たわっているもの」としてではなく，「つぎつぎに自らそうした段階を形成してゆくところの実体，すなわち主体とみる」からこそ[37]，「古い資本主義」の分析と「帝国主義の分析」とは抽象から具体への一貫した論理によってつらぬかれる。そして，現実の資本主義が段階的に発展するものである以上，「段階の理論」は「資本の一般的概念から出発して，各段階を必然的な契機とするその発展史を当の段階までたどる」という方法によって与える以外にない[38]。私は，森岡氏が提起する「段階論」批判も，「資本主義の基本的特質の分析」と「帝国主義

35)　見田石介「論理＝歴史説とマルクスの方法」『見田石介著作集』大月書店，第3巻，50－132ページ。引用は118ページ。見田石介「資本論の方法」『見田石介著作集』大月書店，第4巻，14－243ページ。引用は137ページ。

36)　資本家間での剰余価値の平等な再分配という平均利潤法則を，剰余価値再分配という「資本の一般法則」の自由競争段階に固有な歴史的形態ととらえる見解については，次の研究を参照のこと。見田石介「平均利潤法則について」『価値および生産価格の研究』新日本出版，1972年，69－105ページ。

37)　見田石介「宇野弘蔵氏のいわゆる原理論と段階論について」『見田石介著作集』大月書店，第3巻，203－266ページ。引用は204ページ。

38)　前掲・見田石介「宇野弘蔵氏のいわゆる原理論と段階論について」203ページ。

の分析」とを，抽象から具体への一貫した論理によって結合するレーニンの方法にそって展開されるべきだと考えるし，レーニン以降の新しい現象の分析についても同様の方法にしたがって「つけくわえる」ことができると考えている。

VI 独占資本主義論の現代的発展のために

マルクスやレーニンの方法に学びながらも，現代の経済学者はマルクスやレーニンの見ることのなかった新しい現実を分析せねばならない。とりわけ『帝国主義論』の何が今日においても有効であり，何がすでに失効しているかを現実の分析をつうじて確認していく作業は，独占資本主義論の現代的発展にとっての中心課題をなす。自由競争段階の資本主義がその内部にいくつもの発展段階をもつように[39]，独占段階の資本主義もまたその内部に段階的発展を避けることができない。独占段階のごく初期の資本主義をしか分析することのできなかったレーニンは，初期の独占資本主義に固有の法則あるいはその現象形態と，今日にいたる独占資本主義の発展史全体につらぬく一般法則あるいはその現象形態とを区別する条件をもたなかったのであり，それを区別する作業は現代に生きる私たちの仕事である。

生産と資本の集積のいちじるしい進展は多国籍企業，多国籍銀行という金融資本の新しい運動形態を生み出し，資本輸出のあらたな形態として発展した直接投資は，間接投資や商品輸出の構造を大きくつくりかえている。大恐慌や世界大戦を契機とした金融寡頭制の発展や，国家と経済との結びつきの深まりは，資本の国際化をも基礎としながら国家独占資本主義とその国際的連携の発展を生み，経済的領土分割闘争と政治的な領土分割闘争とを分離させることに成功した。独占資本主義のこうしたレーニン以後の発展を理解する上で，資本の巨大化と国際化を支えた生産，運輸，通信技術の急速な発展をとらえぬわけにはいかない。また労働者階級の消費生活の一定の向上や植民地主義の崩壊をまね

39) 自由競争段階における資本主義の段階的発展については，見田石介「資本の一般的理論とその発展諸段階の理論との関係について」『見田石介著作集』第3巻，178—201ページを参照のこと。

いた国民主権や民族自決権など政治的民主主義の前進も，資本主義の今日的形態を理解する上で不可欠の構成要因といえるし，ソ連・東欧諸国との軍事的対抗という政治的環境が現代の独占資本主義に与えた影響も大きい。

レーニン以後の独占資本主義の新たな発展を指摘することは，他にも様々に可能であり，そうした仕事はすでにいろいろな形で行われつつある。したがって，ここでの主要な課題はこれを，独占資本主義の現代的発展段階という一つのまとまりに応じた一つの理論体系にまとめ，「帝国主義の分析」を豊富化すること，つまりレーニンによる「帝国主義の分析」に我々の現代的な「帝国主義の分析」を「つけくわえ」，その両者をもって現代における「帝国主義の分析」の全体像を明らかにしていくことにある。また，現代「帝国主義の分析」の内的な理論構成についていえば，それは，「資本主義の基本的特質の分析」の全体像が『資本論』にとどまらぬ経済学批判体係であるのと同様の理由によって[40]，マルクスの経済学批判体係の構成にしたがってまとめる以外にない。

マルクス主義経済学は，生産様式を研究する科学としての自覚を新たにせねばならない。マルクス主義経済学は，次々と新しい段階を形成しながら発展する資本主義の全歴史過程を，統一的に把握する単一の理論体系をもたねばならない。私は森岡氏による問題提起の内容を主にこのように受け止めている。そして，その問題を解決していくことの大きな意義を認める立場から，問題解決をめぐる共同の建設的な討議の一翼を担うべく小論を提起した。ヒルファーディングの方法論の検討など，氏の幅広い問題提起の全体を検討するにはいたっておらず，また氏の問題提起のきっかけをつくった有井行夫氏の見解については何もふれることができていない。今後の課題とさせていただきたい[41]。

(1994年5月11日)

---

40)　経済学批判体係の方法については，前掲・見田石介「『資本論』・『帝国主義論』・国際経済論」，前掲・見田石介「宇野弘蔵氏のいわゆる原理論と段階論について」を参照のこと。

41)　本稿後半であつかったレーニンの独占資本主義論の内容については，次の論文に，より詳しく展開してある。合わせて御検討願えると幸いである。拙稿「レーニン『独占資本主義』論の若干の基本問題——見田石介の方法論研究に学びながら」『唯物論と現代』（関西唯物論研究会責任編集）第13号（1994年4月）。